

みずほ検定

（歴史・史跡・地名・産業文化編）



MIZUHO WARD
SINCE 1944.2.11



目次 歴史・史跡・産業文化編			
瑞穂区の生い立ち 1			
○瑞穂区の地形 1	○古い時代の瑞穂 4		
○瑞穂区の最初の住人？ 2	○江戸時代から明治時代の瑞穂 5		
○祖先が繁栄した跡？「古墳」 3	○瑞穂区の誕生 6		
瑞穂区の産業の歩み 7			
○麦稈真田（明治初期～明治後期）..... 7	○近代産業のはじまり（明治後期以降）..... 9		
○養鶏業（明治後期～昭和）..... 8			
○瑞穂区に整備された古い道（東海道・郡道・里道）.....11・12			
瑞穂区の史跡（地図）13・14			
瑞穂区の史跡15			
1 中山神明社15	26 龍泉寺26		
2 信正寺15	27 長福寺27		
3 八高古墳16	28 浜神明社27		
4 八劔社16	29 八丁畷址28		
5 高田城跡16	30 東ノ宮神社28		
6 盛屋寺17	31 藤原師長謫居地29		
7 金龍寺17	32 名古屋市博物館29		
8 富士八幡社18	33 東栄八幡社29		
9 神之内八幡社18	34 村上神社・おどり山古墳30		
10 一之御前社18	35 東山荘30		
11 蛇塚遺跡19	36 正及神社31		
12 直来神社（直會社）.....19	37 暮雨巷31		
13 海上寺20	38 善進寺32		
14 八幡社・白山社20	39 真好天神社32		
15 瑞穂遺跡21	40 瑞穂古墳群33		
16 秋月院21	41 下内田貝塚33		
17 大喜遺跡22	42 大曲輪遺跡34		
18 田光八幡社22	43 あゆちの水34		
19 大喜寺23	44 中根銅鐸発見地35		
20 田光遺跡23	45 西八幡社36		
21 白龍社24	46 宝蔵寺36		
22 津賀田神社24	47 中根中ノ城跡37		
23 天聖寺25	48 東八幡社37		
24 おつくり山古墳25	49 観音寺38		
25 為麿塚25	50 馬頭観音38		

目次 地名編			
瑞穂区の地名 瑞穂区の町名39			
旧村名と字名（地図） 瑞穂区の現町名図（地図） 40			
町名解説41			
荒崎町41	雁道町46	竹田町52	平郷町57
石川町41	北原町46	岳見町52	宝田町57
石田町41	軍水町47	田光町52	堀田通58
市丘町41	駒場町47	田辺通53	本願寺町58
井戸田町41	桜見町47	玉水町53	前田町58
井の元町42	薩摩町47	檀溪通53	牧町58
茨木町42	佐渡町47	津賀田町53	松栄町58
浮島町42	塩入町48	佃町53	松園町58
牛巻町42	汐路町48	土市町54	豆田町59
内方町43	下坂町48	東栄町54	丸根町59
内浜町43	下山町48	豊岡通54	密柑山町59
太田町43	春敲町49	苗代町54	瑞穂町59
御菟町43	松月町49	直来町55	瑞穂通60
大殿町43	白砂町49	中根町55	御劔町60
鍵田町44	白羽根町49	中山町55	南山町60
柏木町44	新開町49	西ノ割町55	妙音通60
片坂町44	洲雲町50	仁所町55	村上町60
甲山町44	須田町50	菰山町55	明前町60
釜塚町44	洲山町50	白竜町56	桃園町61
上坂町44	関取町50	八勝通56	師長町61
神穂町45	膳棚町50	初日町56	弥富ヶ丘町61
神前町45	惣作町51	花目町56	弥富町61
上山町45	十六町51	春山町56	弥富通62
亀城町45	大喜新町51	日向町56	柳ヶ枝町62
河岸一丁目45	大喜町51	姫宮町57	山下通62
河岸町46	高田町52	二野町57	陽明町62
川澄町46	高辻町52	船原町57	
参考文献・資料63			

表紙・裏表紙について

明治24年（1891年）測図2万分の1「名古屋」（表紙）「熱田」（裏表紙）

瑞穂区の生い立ち

瑞穂区の地形

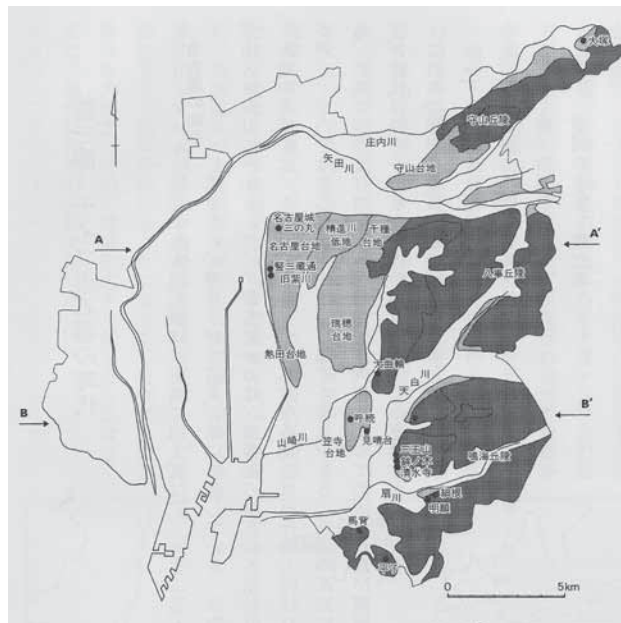
名古屋市の地形は、東の丘陵から順に、台地、低地、と西に向かって低くなっており、瑞穂区のはほとんどは、丘陵（八事丘陵）と台地（瑞穂台地）の上にある。

区の西部や南部の天白川沿いは平坦で、東部に行くにしたがい丘陵地帯が多くなっている。

区境や区内を新堀川・山崎川・天白川の三川が流れている。

区 分	構 造	標 高	地 質
弥富丘陵 山崎川の東側 天白川の北側	八事層 約 8 0 ～ 1 0 0 万年前 の堆積 南西に傾斜	弥富円山 4 7 . 1 m 萩山 2 0 m	砂、礫（＝小石）、シルト（＝砂と泥の中間）の層 水平に並んだチャート石（白色か赤褐色）を多量に含んでいる
瑞穂台地 山崎川の西側 精進川の東側 （新堀川）	熱田層 八事層の上に、 約 4 ～ 1 5 万年前の堆積 南西に傾斜	桜山 1 7 . 5 m 瑞穂小 1 5 m 井戸田 1 0 m	砂・シルト・粘土・礫の層 黄褐色 表土（砂・礫）の下に粘土層、地下水を多く含んだ層

名古屋の丘陵と台地 「名古屋市史」



瑞穂区の最初の住人？

～縄文時代の人々が住んでいた跡

瑞穂区のあたりでいつごろから人が住み始めたのかは、はっきりしていないが、瑞穂区内で発見された遺跡（^{かけがみ}欠上貝塚・^{おおぐるわ}大曲輪貝塚・^{しもうちだ}下内田貝塚）では、人が生活をした跡が見つかっている。

これらの遺跡から、今から約4～6千年くらい前（縄文時代の一時期）には、瑞穂区内で人が暮らしをしていたと思われる。ただし、このころに人が瑞穂区に定住して生活していたかどうかは、その後、弥生時代に農耕生活を始めるまでは、食料を求めて移住する不安定な生活をしていたのではないか、と考えられている。



大曲輪遺跡から出土した人骨



貝塚の分布

「名古屋市史」

～大昔の人々の暮らしと文化

縄文時代のころは、樹の実を採集したり、狩猟していた山間などの暮らしから、海岸へ進出し漁を行う暮らしをしている人々があらわれるが、瑞穂台地のふちのあたりの欠上貝塚・大曲輪遺跡（貝塚）・下内田貝塚・瑞穂遺跡・田光遺跡などからその遺物が発見されている。

多くは、土器（食料を貯蔵、調理）が見つかり、その他に石の矢じり（狩猟の道具）犬・猪・鹿の動物の骨・貝殻（食料）が出土している。また、珍しいものとしては、縄文人とされる人骨とイヌの骨が共に発見されたもの（一緒に埋葬された？）や土偶が^{どぐろ}大曲輪遺跡で発見されている。

弥生時代は、米を作る生活にかかわっており、ある程度定住し、人々もまとまって生活していたものとされ、瑞穂遺跡がそのころの集落の跡（弥生時代中期から古墳時代）とされる。

瑞穂遺跡で発見された遺物は、遺構（堅穴住居跡55戸以上、水を引いたとされる壕^{ほり}など）、弥生土器、銅の矢じり、勾玉やガラス玉の祭祀用具などがある。瑞穂遺跡は、弥生時代からの遺跡とされるが、遺物には、縄文土器や堅穴住居、狩猟・漁の道具など縄文文化のものもみられるので、米作り生活中心の弥生文化のみではなく、縄文と弥生の複合した文化であったことがうかがえる。

また、弥生時代は青銅器・鉄器などの技術が大陸から伝わっているが、この文化を伝える代表的なものとして銅鐸どうたくが区内で発見されている。「中根の銅鐸」として有名であるが人手に渡り、兵庫県西宮市の辰馬たつま考古資料館にあり、国の重要文化財となっている。

～古くから人が住んでいた瑞穂区

瑞穂区の「遺跡」というこん跡は、「何千年も前から人が住んでいた」、「大昔に人の暮らし文化が始まっていた」ことを物語っている。永い歴史あるこの地域は、人々が長く住み続ける風土があり、環境や文化が変わっても人々が安住する場所なのかもしれない。

祖先が繁栄した跡？「古墳」

瑞穂区の古墳

弥生時代を経て米作りがさかんになるとその地に定住し、暮らしが安定し人口が増え、人々は集まって生活をするようになった。集落（むら）ができることによってその中から力を持つ者も現われた。その有力者や豪族と呼ばれる人の「墓」を大きな丘の様につくるようになった。これが4世紀くらいから7世紀くらい（1,700年から1,300年前）にかけてつくられた「古墳」である。

瑞穂区には、古墳群といわれるほどの多くの古墳が残っていた。また、「塚」と呼ばれるものも加えると30を超える古墳が存在したといわれる。

瑞穂区の古墳

No	古墳名	所在地	古墳の大きさや形状	現状
1	八高古墳	瑞穂町字西藤塚	全長約70 mの前方後円墳	残存
2	八高2号墳	瑞穂町字西藤塚	直径30 m、高さ2 mほどの円墳	残存
3	高田古墳	高田町3丁目	全長約80 mの前方後円墳	消滅
4	高田2号墳	高田町3丁目	不明	消滅
5	高田3号墳	高田町3丁目	不明	消滅
6	高田4号墳	高田町3丁目	不明	消滅
7	高田5号墳	高田町3丁目	長径11 m、短径8 m	残存
8	薬師寺古墳	本願寺町2丁目	直径5 m、高さ3 mの円墳	消滅
9	津賀田古墳	津賀田町2丁目	直径12 m、高さ3 mの円墳	残存
10	姫塚古墳	井戸田町3丁目	一辺12 m、高さ3 mほどの台形状のかたまり	残存
11	ためまる古墳	井戸田町1丁目	直径20 m、高さ3 mほどの円墳	消滅
12	劔塚古墳	井戸田町4丁目	高さ3 mほどの円墳	消滅
13	おつくり山古墳	井戸田町4丁目	直径25 m、高さ6 mほどの円墳	消滅
14	おどり山古墳	村上町1・2丁目	高さ4.5 mの円墳	残存
15	下山古墳	田辺通3丁目	丘陵端の円墳	消滅
16	瑞穂1号墳	豊岡通3丁目	直径15～20 m、高さ4 mほどの円墳	残存
17	瑞穂2号墳	豊岡通3丁目	直径30 m、高さ5 mほどの円墳	残存
18	瑞穂3号墳	豊岡通3丁目	台地縁の円墳	消滅
19	琵琶ヶ峯古墳	田辺通4丁目	丘陵端の円墳	消滅
20	井守塚	軍水町1丁目	直径15 m、高さ2.5 mほどの円墳	消滅

一覧は、過去の調査によって古墳とされたもの。「瑞穂区誌」



「瑞穂区誌」

古い時代の瑞穂

～尾張国愛智郡

大化の改新（大化元年＝645年）により、私有地、私有民の廃止、条里制、戸籍と検地による班田収受の法の実施、庸・調の税制の統一などが行われ、その後の大宝律令（大宝元年＝701年）で律令国家の基本が確立した。大宝律令では、地方を約60国に分け、500の郡、3,000の里を置き、国司、郡司などによって、政治が行われるようになった。「尾張国」はこのとき成立し、中島・海部・葉栗・丹羽・春部・山田・愛智・智多の八郡からなっていた。（和名類聚抄＝平安中期の書物）

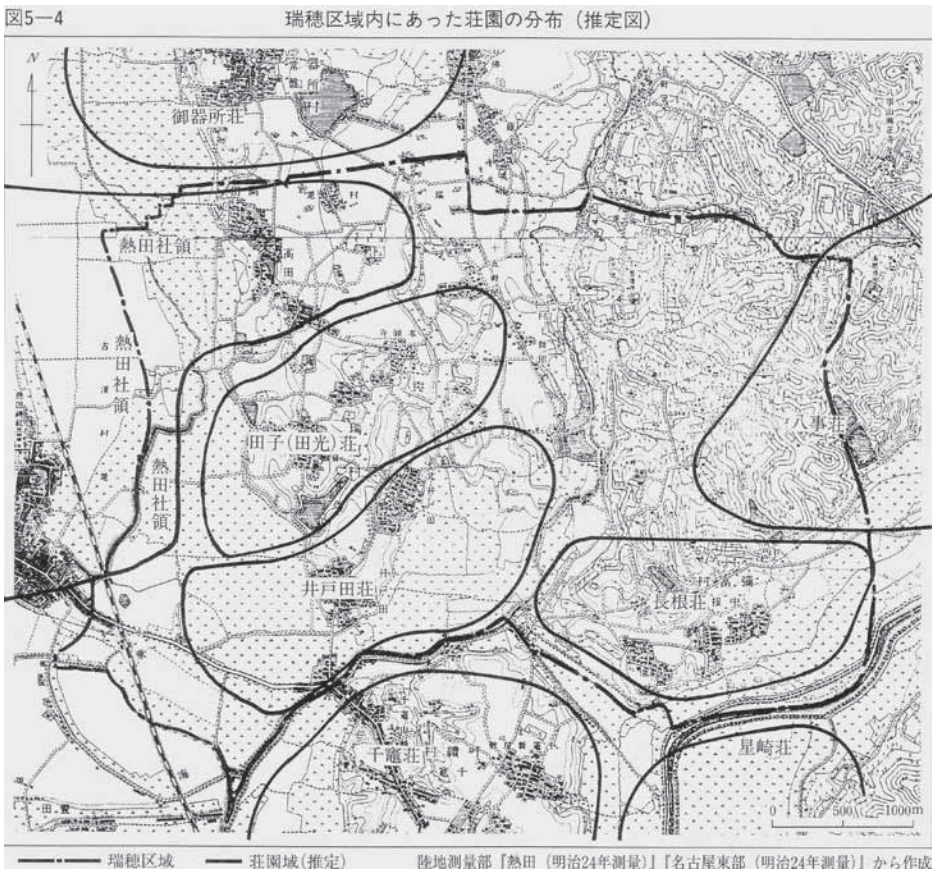
～瑞穂区の荘園

奈良時代～平安時代には、貴族や寺社が土地の開墾などを行い、大規模な私有地＝荘園が各地にできはじめた。

このころの瑞穂区には、田子（田光）荘・井戸田荘・長根（山田）荘・八事荘があったとされ、これらに加え熱田神宮の熱田社領があったとされる。

～荘園から「村」へ

鎌倉・室町・江戸時代と経て、武士が国を支配し、幕府が政治を行い、「藩」が置かれるようになると、田子（田光）荘は、高田村、本願寺村、大喜村。井戸田荘は、北井戸田村、本井戸田村。長根（山田）荘は、中根村。八事荘は、八事村。などに分かれた。



「瑞穂区誌」

※なお、荘園や村の名のほとんどは、江戸時代のころの書物などで確認しているものであるので、古い時代では、その様な名称や地名であったかは定かではないものが多い。しかし、瑞穂区の古い地名は、江戸時代にはすでにあったものとされる。

江戸時代から明治時代の瑞穂

～江戸時代の瑞穂区

江戸時代になると、名古屋城ができ、城下町もつくられ、名古屋が栄えはじめた。

万^{まん}治年間（１６５８～１６６１年）から尾張藩士兼松源蔵と浪人小塚源兵衛が、昭和区から瑞穂区にかけての荒れ地を開墾し、田畑にした。名古屋新田である。

瑞穂区は、田畑の広がる農業地域であり、熱田や城下町へ農作物を供給していた。

～明治時代「瑞穂・弥富」の地名誕生

明治時代になると、尾張藩に属したこの地域は、明治２年（１８６９年）に名古屋藩になり、明治４年（１８７１年）廃藩置県が行われると、名古屋県となり、明治５年（１８７２年）には、愛知県となった。

明治政府が発足し、先ず税収入の確保を図ることとなり、地^ち租^そ改正が行われた。

地租改正は、米の取れ高でなく、地主に土地の質と面積で課税するので、入り組んだ村境や飛び地を一举に解決するため、村を大合併させた。

明治９年（１８７６年）当時の県令（知事）安^{やす}場^ば保^{やす}和^{かず}によって、瑞穂台地の七村と名古屋新田は瑞穂村に、その後、八事丘陵の三村と名古屋新田は、弥富村となった。

合併後の新しい村	合併前の旧村名
瑞穂台地＝ 瑞穂村	高田、高田新田（中山）、大喜、北井戸田、本井戸田、本願寺、本願寺外新田（十五軒家）、名古屋新田（村上）
八事丘陵＝ 弥富村	中根、上八事、下八事、名古屋新田
東熱田村 ※明治11年	熱田

- ・瑞穂という地名は、明治元年９月（1868年）、明治天皇が、八丁^{はっちようなわて}畷で稲の収穫作業を視察したこともあり、稲が豊かに実ところ（日本書紀の秋瑞穂之地）にちなみ命名されたと思われる。
- ・弥富は、「いや・とみ」とよび、弥は、いよいよ、ますますの意で、富は、ゆたかの意。組み合わせて、『ますます、ゆたか』な村となる。

※今の瑞穂区は、米を作らなくなっているが、区内の市立小中学校１６校中、稲穂を校章にしている学校が８校（堀田・井戸田・穂波・瑞穂・豊岡・弥富小学校、田光・瑞穂ヶ丘中学校）ある。

～その後の瑞穂

- ・明治２２年（１８８９年）名古屋市誕生（瑞穂区の村は、**愛知郡**）東熱田村→古沢村
- ・明治３１年（１８９８年）古沢村→**熱田町**大字東熱田
- ・明治３９年（１９０６年）瑞穂村→**呼続町**大字瑞穂　弥富村→**呼続町**大字弥富
- ・明治４０年（１９０７年）熱田町大字東熱田→**名古屋市熱田東町**
- ・明治４１年（１９０８年）名古屋市熱田東町→**名古屋市南区熱田東町**
- ・大正１０年（１９２１年）呼続町大字瑞穂、呼続町大字弥富→**名古屋市南区瑞穂町**、弥富町
- ・昭和１２年（１９３７年）名古屋市南区瑞穂町、弥富町→**名古屋市昭和区瑞穂町**、弥富町
名古屋市南区熱田東町→**名古屋市熱田区熱田東町**

瑞穂区の誕生

～瑞穂区誕生のいきさつ

瑞穂区の設置は、太平洋戦争末期の緊迫した中で行われた。

昭和１８年１２月１８日、臨時市会に緊急議案として提出された、市長の説明要旨は、

- 一　昭和区を二分し、人口10万人ずつに分区する、消防署も分かれる、防空防衛の態勢を万全なものにする。
- 二　愛知県の警察の管区と、名古屋市の行政区を一致させる。
即日可決。

～昭和１９年２月１１日（１９４４年）、瑞穂区誕生

他に北区・栄区が誕生、栄区は翌２０年に中区に編入された。

地域は、学区を単位として、旧瑞穂村と旧弥富村それに熱田東町を加えたもの、名前は瑞穂村にちなみ瑞穂区となった。

庁舎は、大喜の天理教東愛大教会の建物を借用し、講堂に、総務課と税務課が入り、道路に面した南に仮棟を建て、戸籍兵事課と経済課が事務を執り、米・衣料品などの切符配給を扱った。
その後は、空襲などの理由で、名古屋市立高田国民学校校舎、水道局第三出張所と移転し、昭和２２年１１月（１９４７年）に瑞穂区役所庁舎が完成し業務を開始している。

～瑞穂区空襲被害

- ・瑞穂区は、隣接する熱田区に軍需工場などや堀田通にも工場があったため、爆撃をされる目標となっていた。
- ・区内の死者は、１７４人、負傷者は、２４１人、罹災した者は、１６,１４３人であった。
- ・被害を受けた建物などは、瑞穂区役所、第八高等学校、御劔・高田・瑞穂・汐路国民学校が全焼、区内３８の工場が焼けた。
- ・名古屋市は、空襲が激しくなったため児童を「集団疎開」させる方針を出した。
瑞穂国民学校でも何人かが集団疎開をしているが、「空襲の最中、名古屋駅から出発した児童たちが、汽車の中から、名古屋城が空襲をうけ炎上しているところを見て、声を出す元気もなくただだまって見ていた。」という話が残っている。
- ・津賀田神社や龍泉寺を始め、瑞穂区内の神社や寺も焼けたところがあり、貴重な文化財が失われている。

瑞穂区の産業の歩み

ばっかんさなだ
麦稈真田 (明治初期～明治後期)

明治時代の瑞穂区の農業

名古屋の近郊にある瑞穂村や弥富村は、明治に入ってから農業者が中心であった。稲作は山崎川に沿った低地、瑞穂台地の西を流れる精進川に沿った低地および弥富丘陵の南を流れる天白川沿いの低地に広がっていた。畑作は瑞穂台地で行われ、麦の栽培が盛んにおこなわれていた。

麦稈真田の製造

瑞穂台地でとれた裸麦を使って、明治 10 年代から麦稈真田が製造されるようになった。麦稈真田とは、麦わらを平たくつぶし、さなだひも（平たい織紐）のように編んだもので、明治 4 年 (1871) かわだ たにごろう 河田谷五郎によって考案されたとされている。河田は横浜で町役人をしており、外国人がかぶっている麦稈帽子を見て麦稈真田を考案した。明治 16 年 (1883) に愛知郡山崎村の人が麦稈真田の伝習を受けて帰り、その製作を開始。それ以来、熱田を中心に付近の集落にも同業者が増加し、明治 20 年 (1887)、愛知県麦稈真田同業者組合が設立、中国大陸にも輸出されるようになった。なかでも、同年、熱田に麦稈明商社が設立されたことは、瑞穂の農家に大きな影響を与えた。製造は、主として農家の女性が内職で夜なべ仕事にしていた。麦を青刈りして天日で干し、硫黄で漂白、平らにして糸で紡ぐことができるようにするまでが仕事だった。当時、貴重な現金収入で、器用な娘であれば、1 円もとれてとてもいい内職であったといわれた。このように、麦稈真田は明治初期の瑞穂区の主な産業として発展ゆくが、その後、木材を紙のように薄くけずった経木を編んで作る経木帽子や有松絞の括りの普及により、麦稈真田の内職は徐々に行われなくなった。

麦稈真田の手仕事は消えていったが、その後、麦稈真田をきっかけに、瑞穂区で大きく飛躍する企業が現れる。それが、今日のブラザー工業株式会社を始めとするブラザーグループである。

●ブラザー（ブラザーグループ＝ブラザー工業株式会社など）

○明治 41 年 (1908 年) 「安井ミシン商会」が創業。

○昭和 3 年 (1928 年) 初のブラザー商標を冠した「麦わら帽子製造用環縫ミシン」を発売。

※「昭和三式ミシン」とも呼ばれたこのミシンは、耐久性にすぐれたため注文が殺到したという。
○昭和 7 年 (1932 年) 瑞穂区平郷町に工場を設備、シャトルフックの量産化に成功し、家庭用ミシンの国産化に成功する。※シャトルフックは、ミシンの主要な部品で量産化が鍵となっていたが、瑞穂区平郷町に建てられた工場での量産が成功したことによって、家庭用ミシン第 1 号が誕生、ブラザーの飛躍に繋がっている。平成 20 年 (2008 年) 創業 100 周年を迎えたブラザーの今は、情報通信機器を主力製品に世界市場へ向けて事業を展開している。

麦稈真田の作業



「瑞穂区誌」

養鶏業 (明治後期～昭和)

瑞穂区における養鶏業の起こり

かつて名古屋市は“養鶏王国”と呼ばれるほどに養鶏業が盛んであった。そして、その中心地は瑞穂区であった。瑞穂区における養鶏業は廃藩置県により、失職した武士が生活費を得るために養鶏をはじめたことが起源である。明治 20 年代には、旧尾張藩士、海部壮平・かいふ そうへい 正秀兄弟が、尾張の地鶏と中国のパフコーチンとを掛け合わせて新種の鶏を作りだした。これが名古屋コーチンであり、粗末な餌でもよく育ち、多産で肉質も優れていたことから評判を得て、明治 38 年 (1905)、日本家禽協会が新種として公認した。

明治における養鶏業の発展

名古屋コーチンが関西方面へ多く進出したことで、瑞穂区の養鶏業は有名になっていった。明治 39 年 (1906) には、長野県から来た大江亥太郎が大喜で人工ふ卵業をはじめ、人工飼育が奨励された結果、養鶏はますます盛んになった。そして、明治 44 年 (1911) に井戸田養鶏組合（組合員数 8）、翌 45 年に大喜養鶏組合（組合員数 16）が設立された。また、農家では雑穀を飼料にして庭先で 10 ～ 30 羽程度の養鶏を行っていた。

農家の副業であった養鶏



「瑞穂区誌」

大正時代の養鶏業

大正時代になると、千羽以上の鶏を飼育していた大養鶏家が出現していた。その一方で、組織だった分業化もはじまり、現大喜町付近に大喜種禽孵化場が開設され、養鶏家は卵から返した雛を成禽に育てる若鶏づくりの形態が続いた。大正 11 年 (1922) には、名古屋市養鶏組合連合会が創設され、この地方が養鶏王国として全国的に有名になった。

昭和時代の養鶏業

昭和に入ってから養鶏業は盛んで、昭和初期の頃には、瑞穂区に鶏の雌雄鑑別という新しい職業が発生した。雛の雄雌を鑑別することで雌鶏だけを効率よく飼育できるようにしたのである。その鑑別師の養成機関である社団法人全日本初生雛鑑別協会の鑑別師養成所が瑞穂区の瑞穂通 3 丁目 11 番に置かれていた。

このように発展していった養鶏業であるが、第二次世界大戦により、飼料の統制が強化され、飼

初生雛の指頭鑑別



「瑞穂区 - その生い立ちから -」

育数が減少した。そして、終戦当時の飼育数は皆無に等しかった。当時は如何に復興するかが憂慮されている状態であった。

しかし、戦後戦災の復興とともに養鶏も再出発を果たした。昭和 24 年 (1949) には鶏卵の品不足に伴い、価格が高騰したことも手伝って、順調に飼育羽数を伸ばしていった。再興の初期には一般家庭での自給用の飼育も多く見られたが、徐々に衰退していき、専業養鶏家がほとんどとなった。飼育方法も近時^{きんじ}バッテリー式と呼ばれる、立体的に鳥かごを積み重ねてまとめた飼育舎を使用する方法が採用され、より多くの飼育が可能となった。

また、昭和 30 年代には耕地整理・区画整理の影響で市街地化が進み、衛生上の都合により、飼育戸数が減少していった。そのため、1 カ所で大規模な飼育を行うようになり、飼育羽数自体は 2 万羽程度と最盛期と変わらないが、養鶏家が多数あった明治や大正の姿とは大きく異なるものとなってしまった。

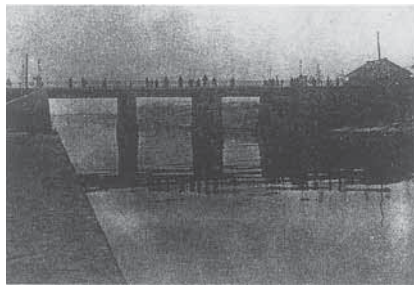
近代産業のはじまり (明治後期以降)

瑞穂区における近代産業の起こり

今では、多くの大きな企業が存立する瑞穂区であるが、明治時代末期までは大きな工場などは存在しなかった。現在多くの企業や工場がある瑞穂区西部も、明治時代は水田であった。精進川（現在の新堀川）の川幅が狭く、頻繁に氾濫し、大きな被害をもたらしていたため、工場を立地する場所としては適さなかったのである。

明治時代に日露戦争がはじまるころ、熱田に兵器工場を建てるにあたり、多くの土砂が必要となり、精進川から掘り出された土砂を利用することとなった。工事は 5 年の年月をかけ、明治 43 年 (1910 年) に完成し、翌年、川名を新堀川と改めた。この工事により、流路延長 5.95 キロメートル、流域面積 23.4 キロメートルの新運河が完成し、物資の運搬等の利用が出来るようになった。これにより、瑞穂区の新堀川沿岸部に多くの工場が建てられるようになった。また、大正時代になると、耕地整理が行われ、それまで水田として利用されていた土地にも多く工場が建てられたのである。

竣工まもないころの精進川
(新堀川)の記念橋



「瑞穂区誌」

瑞穂区における近代産業地域の発展

明治 43 年 (1910 年) に河川の改修が竣工し、新堀川沿岸にはたくさんの企業が設立または移転してきた。大正 8 年 (1919 年) には、日本碍子（現在の日本ガイシ株式会社）が日本陶器株式会社より碍子^{がいし}部門を分離独立し、瑞穂区に設立した。また、昭和 8 年 (1933 年) 合名会社エルモ社（現在の株式会社エルモ社）の工場が瑞穂区に建設された。昭和 12 年 (1937 年) に株式会社中央製作所が現在の内浜町あたりに設立された。昭和 14 年には小林製作所（現在の株式会社パロマ）が瑞穂区に工場を移転した。

このように、現在にまで残る大きな企業が、続々と瑞穂区に拠点を置くようになった。このことから、瑞穂区における近代工業の発展は、新堀川によるところが大きいといえるだろう。

瑞穂区で発展してきた企業

現在に至るまで瑞穂区の新堀川沿岸で発展してきた主な企業について、企業の発展の歴史や事業内容等はおおむね以下のとおりである。

●日本ガイシ株式会社

日本ガイシ株式会社は大正 8 年 (1919 年) に日本陶器株式会社より碍子部門を分離独立して、現在地に設立した。主として特別高圧碍子^{がいかん}・碍管類の製造販売を開始した。日本ガイシがいちはやく、この地を選んだのは、名古屋市東部の豊富な労働力と、海陸輸送の便に恵まれていたことによる。そして、本社工場の増設や知多・熱田への工場建設などを経て日本を代表する大企業へと成長した。日本ガイシの電気絶縁用碍子や化学工業用機器類などの製品はいずれも、基礎産業の上に欠くことのできないものとなっており、品質においても一流メーカーとして広く海外市場にも進出している。

●株式会社エルモ社

株式会社エルモ社は、大正 10 年 (1921 年) に中区に^{さかき}榊商會を創立し、写真引伸機・焼枠・掛枠・三脚などの写真器部品を製作販売したことにはじまる。現在の会社の創立は、合名会社エルモ社として、昭和 8 年 (1933 年) になされた。同時に工場を瑞穂区（当時の熱田区東町上明前）に増設した。その後、昭和 24 年に株式会社へと改組し、現在の株式会社エルモ社となった。

エルモ社の特徴は、小型映写機の研究とフィルム送り装置などの発明考案を完成させたことであろう。この発明は、映写機が世の中に普及していくのに大きく寄与したといえる。

●株式会社中央製作所

株式会社中央製作所は昭和 11 年 (1936 年) に、ミズホ製作研究所（試験化学工場）が中村区に設立されたことにはじまる。同年に、ミズホ製作研究所を継承する形で、株式会社中央製作所が設立されたのである。そして、昭和 12 年 (1937 年) に本社及び工場を瑞穂区の現在位置に移した。

中央製作所は電気メッキ、アルマイト等金属表面の処理業界では日本のトップメーカーである。工場レイアウトから据付配線管まで、メッキ・アルマイト装置のプラントメーカーとして、高圧配電設備や操作盤などの設備機械全般を供給できるメーカーとして、多くの会社への搬入実績を持っている。

●株式会社パロマ

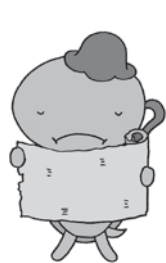
株式会社パロマは、明治 43 年 (1910 年) に小林製作所として創業されたことにはじまる。その後、大正 11 年 (1922 年) に熱田区へ移転し、さらに、昭和 14 年 (1939 年) に瑞穂区桃園町へ工場を移した。

昭和 3 年ごろより航空機部品の製造にも着手、第二次世界大戦では、燃料ポンプ等の製造に力を入れていた。そのため、戦後はGHQにより賠償工場に指定され、制約の苦しみをうけた。しかし、この時代を切り抜け、世相の安定とともに、瓦斯器具は飛躍的發展をとげ、パロマ瓦斯器具の名をもって海外にも進出した。昭和 37 年 (1962 年) には小林製作所から製造部門をパロマ工業株式会社として分離独立した。また、販売部門を株式会社パロマとした。そして、平成 23 年 (2011 年) にパロマ工業株式会社と株式会社パロマが合併し、現在の株式会社パロマを発足させた。

瑞穂区に整備された古い道

東海道

- 江戸幕府は、日本橋を起点とした五街道と脇街道を整備し、駅伝制（一定の距離の間に駅を置き、公人や役人が移動しやすくしたり、ものを運びやすくした）を敷いた。
- 東海道は、江戸から京まで 125里53駅を定め、今の瑞穂区内では、山崎橋から宮の宿熱田橋の間の10町（1,090.9m）。
- 途中8丁（町）（約873m 1丁（町）＝109.09m）は松並木で、「八丁なわて畷」といわれた。戦前まで少し残っていた。
- 宿場の手前（熱田橋のたもと）に88番目の一里塚があったが壊された。
- 道は、人や兵馬、物資の輸送で通るだけでなく、情報や命令なども道を通して伝えられた。
- 幕府の道中奉行により厳しく管理されており、沿道周辺の村では、駅伝に人馬の不足するときには村高に応じ協力し、日常の道の清掃、補修も負担した。
- 武士以外の往来が増えてくると、各地の色々な様子が伝わり、夢と憧れを運ぶ道となった。
- 山崎橋のふもとに、旅人相手の商店や修繕屋が並び、井戸田出口組（今河岸端）となった。



※鎌倉街道

- 鎌倉幕府が開かれたのち、政治の中心の鎌倉と京都を結ぶ街道が整備された。この街道を「鎌倉街道」と呼び、各地ではその街道の名残が伝わる道がある。
- 瑞穂区内では、古渡から「高田、大喜、井戸田」を通り呼続へと続いたと伝わるが、実際どのあたりを通っていたのか？諸説があるが、はっきりしていない。

郡 道

①千種街道

- 明治40年（1907年）、熱田町が名古屋市に編入。愛知郡役場は、熱田市場町あったが、郡内で2番目に大きな町である御器所町へ移転した。
- 愛知県は、新役場への交通の便を図るため、新しく道路を開通させた。県庁から飯田街道を通り、千種駅から南へ折れ、新役場に達する道で、同時に新役場から更に南へ、郡内の諸村を繋ぎ、東海道山崎に達するもので、（千種区千種町から南区呼続町字千竈ちかま）南北の幹線道路として郡の管理とした。
- 南部では千種街道、北部では山崎街道とも呼ばれたが単に郡道と言った。
- 大正11年（1922年）、名古屋市に合併され愛知郡ではなくなったが、耕地整理組合が道路を造ったので、開通から百年経たが、未完成の所が残って居り、今でも郡道と呼ばれている。
- 昭和6年（1931年）、市バスが井戸田－大津橋の間を通い、栄へ行く人達が乗った、町の内は道幅が狭く、第八高等学校（名市大山の畑キャンパス）の正面を通る所だけ道幅が広くなっており、バスのすれ違い場所であった、正門前バス停でたいていは、北行きが先に来て南行きが来るのを待った。

②平針街道

- 区内には東西の郡道もあり、熱田神宮の東から中根を経て飯田街道の平針に達する道で、平針街道と呼ばれた。
- 平針は駿河街道するがの宿場で、北から足助街道、挙母街道ころもが交わり、南へ天白川に沿い山崎に達する道があり交通の要衝であった。新三河鉄道のバスが神宮前－中根間を通った。
- 大正11年、市営バスとなった。

③高田街道

- 第五中学校正門前（名経大高蔵高校）から西へ、熱田砲兵工廠ほうへいこうしょうの正門（熱田区六野町）を通ると、門に剣付鉄砲ほしゅうの歩哨が立っていた。五中街道ともいい、第五中学校の生徒の通学路であった。雁道・賑町商店街が街道沿いとなる。

里 道

①井戸田道

- 東海道山崎から北に分かれ、井戸田の集落を抜け、津賀田神社を通り過ぎ、本願寺村の薬師寺（本願寺町2丁目）を経て、十五軒家（東栄町）に至る経路は、瑞穂台地の後背地から、東海道へ出る南北の幹線道路となっていた、道は行き先の地名で呼び、北では「いどたみち」といった。

②塩付道

- 塩付街道の名は、塩を馬の背に乗せ、山地の国々へ運ぶうちに自然発生的にできたといわれている。
- 南区戸部町から東区古出来町までの道。瑞穂区内は、釜塚町から山崎川左岸を北上し、左右田橋あたりで川を渡り、瑞穂公園北陸上競技場かなえ（鼎池）を西に迂回してから名古屋女子大学中学高等学校東側を北へ向き、汐路町などを通り、名市大病院の東のあたりから昭和区へ入った。